

目次

開催にあたって	3
目次	4
謝辞・凡例	6
I 武士の肖像	
喜多見重勝	8
井伊直弼	15
遠城謙道	18
吉田松陰	26
福羽美静	26
岡本黄石	32
勝海舟 売茶翁 渡辺華山	32
宇津木泰交	39
II 代官の肖像	
大場弥十郎	48
大場信愛	53
III 文人の肖像	
石井至毅	60
田中休愚	69
川崎平右衛門	71
石井春翁	73
石井房	74
小山田与清	76
齋田東野	81
岡本花亭 齋田小枝子	81
IV 農民の肖像	
福田岡右衛門・とめ	90
飯田コウ	94
飯田安之丞	98
飯田ユウ	101
橋本吉次郎	102
八代目芹沢新平	106
九代目芹沢新平	110
芹沢つね	112
附編	
『文武高名録』	114
岡本黄石 大沼枕山 小野湖山 江馬天江 頼支峰 南摩綱紀	114
松本順 矢土錦山 野口小蘋 嵩古香 三島中洲	120
平出鏗二郎書写「名家肖像集粉本」	120
細井広沢 亀田鵬斎 村田春海 大田南畝	120
山本北山 大窪詩仏 梁川星巖 大槻磐溪	120
主要参考文献	126
出品目録	127

喜多見重勝



1 喜多見久大夫肖像画〈模写〉

紙本著色
 原画筆者 狩野安信
 原画賛者 木庵性瑯
 模写筆者 不詳
 原画作成年代 延宝三年（一六七五）
 模写年代 不詳
 縦七六・五cm×横三六・二cm
 寄託品

喜多見重勝へきたみしげかつ

慶長九年（一六〇四）〜貞享二年（一六八五）

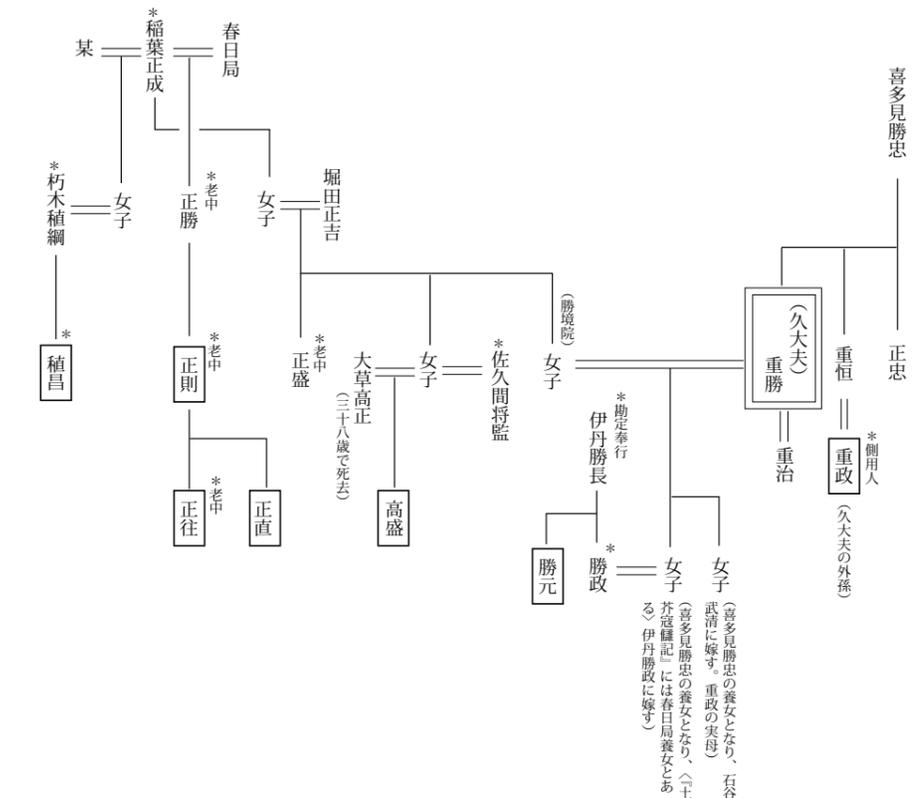
重勝は、江戸時代初期に堺奉行などを勤めた喜多見若狭守勝忠の三男で、自らも一五〇〇石を知行し、目付・大坂目代などの幕府要職を歴任した。通称を久大夫という。また、茶湯を、佐久間将監・小堀遠州らに学び、茶人としての誉れが高く、喜多見流茶道を創始した。

天正十八年（一五九〇）、豊臣秀吉が、かねて敵対関係にあった北条氏を攻めると、久大夫の父・江戸勝重（のち北見勝忠と改称）は、北条氏康の女婿である主君・吉良氏朝と共に北条氏の居城・小田原城に立て籠もり、秀吉の軍勢と戦った。しかし、三ヶ月の籠城の末、豊臣勢の大軍の前に小田原城は敢えなく陥落し、戦いは北条方の敗北に終わった。こうして、江戸勝重は先祖伝来の地・中丸郷北見（現世田谷区喜多見）に潜伏することを余儀なくされた。

一方、北条氏に代わって関東に入国した徳川家康は、戦役ののち関東各地に潜居していた旧家・名族の者たちを家臣に取り立て、その優遇策を計った。文禄元年（一五九二）、江戸勝重も、本領北見村五〇〇石を安堵されている。その際、勝重は、家康の新しい居城の名と同じ「江戸」の称を名乗ることを憚って北見（のち喜多見の字を当てる）に改姓したと伝えられる。

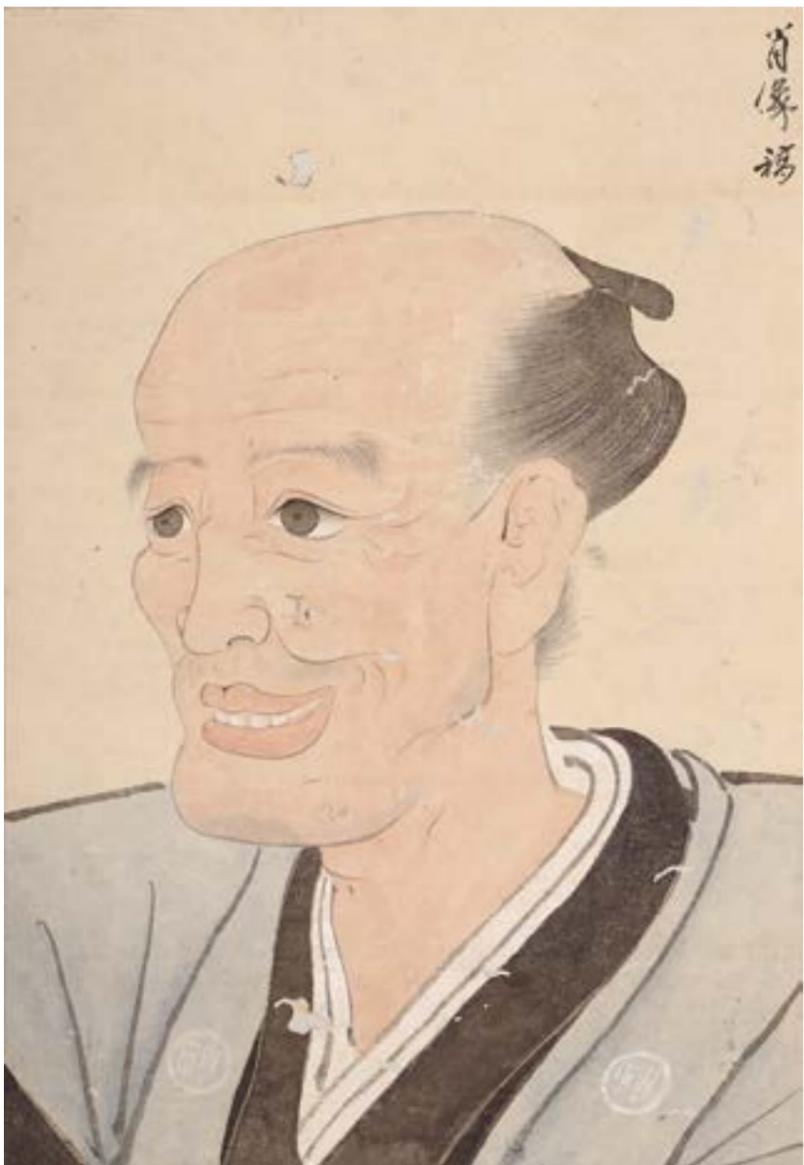
こうして、家康の家臣となった北見勝忠は、大坂の役などで戦功をあげ、幕府の重用するところとなった。さらに、元和三年（一六一七）堺奉行となり（後に摂津・河内・和泉の国奉行を兼ねる）、畿内の幕領支配にその手腕を発揮した。また、武家茶の第一人者・古田織部から茶湯を習い、大徳寺派の僧・沢庵宗彭や小堀遠州といった文化人とも親交を深くし、喜多見流茶道の基礎を築いた。生涯を通じて親しく関わった。

喜多見氏系図



※は大名
 □内は、久大夫茶会記に名前の見える人
 『寛政重修諸家譜』・「喜多見氏系図」（大蔵村旧事考・喜多見村旧事考）所収・『土芥寇讐記』より作成

大場 弥十郎



8 弥十郎肖像〈稿本〉

紙本著色
筆者 不詳
作成年代 江戸時代後期
縦三九・三cm×横二八・〇cm
大場代官屋敷保存会蔵

大場弥十郎〈おおばやじゅうろう〉

宝暦十年（一七六〇）～天保七年（一八三六）

彦根藩世田谷領代官。大場家第十代の当主。遠江国周智郡下山梨村（静岡県袋井市）に久野金右衛門宗保の次男として生まれた。幼名を金蔵、初名を宗寿（のち景運）という。寛政五年（一七九三）、世田谷代官大場家の跡継ぎとなり、翌年代官の職に就く。代官就任早々、民政改革に着手し、多くの業績を上げた。

この絵〔8〕の像主・大場弥十郎は、世田谷代官大場家の第十代の当主で、民政に意を尽くした名代官として誉れが高い。

宝暦十年（一七六〇）十一月十一日、遠江国周智郡下山梨村（静岡県袋井市）に、農民・久野金右衛門宗保の次男として生まれた。幼名を金蔵、初名を宗寿という。のち、旗本五井松平家の用人を勤めていた伯父金原新左衛門信成の養子となって江戸に出たが、寛政五年（一七九三）、三十四歳の時、養家を辞して大場家の跡継ぎとなった。のち、諱を宗寿から景運に改めている。

これはあくまでも推測に過ぎないが、この「景運」という諱は、義父の諱「盛征」に因んで「かげゆき」と訓じさせるのではなからうか（「運」を名乗りに使用する場合、カズ、ヤス、ユキのいづれかである）。

弥十郎の最初の妻は、先代源吾興弘の未亡人梅（再婚後、小枝と改名）で、興弘との間には、既に二男一女があった。時に梅二十六歳。

翌六年四月、弥十郎は世田谷代官に就任したが、それからわずか三ヶ月後の同年七月には、早速、民政改革に着手している。すなわち、「佐野奉行出府御着伺」の簡素化を藩に願ひ出て許されたのである。

佐野奉行は例年九月頃、世田谷領内の村々を廻って視察するのが常であったが、

奉行が江戸に到着する日、世田谷二十ヶ村の名主全員がおの村民一名を伴い、「出府御着伺」と称して桜田の上屋敷へ挨拶に行くのが古くからの習わしであった。

この年九月二十七日に実施された將軍世子家慶の御宮参りに際して、その途上、桜田の井伊家上屋敷に御成があるということになった。このため、井伊家上屋敷は、その準備をする幕府役人等が多数出入りして混雑を極めており、領民が大挙して挨拶に向くのも憚られるような状態であった。弥十郎は、それを良い機会と捉え、「出府御着伺」を総代三名のみの挨拶に改めるよう進言した。この進言が認められて、以後それが踏襲されることとなったのである。

また、寛政八年（一七九六）九月には、先代弘興の時、願ひ出て果たせなかった「豪徳寺祠堂金制度」の廃止を、再度、佐野奉行岡見平夫に願ひ出ている。「豪徳寺祠堂金制度」というのは、宝永三年（一七〇六）に井伊家から豪徳寺へ寄進された廟所永年供養料五〇〇両（祠堂金）を原資として、それを世田谷領民へ貸し付け、年一割の利息を納めさせるといふ制度である。寛政元年（一七八九）段階で、世田谷領民の借財は、二三五両余りに達しており、元金完済の目途もたっていない状態であった。このままでは、毎年、年貢のほかに利息金二十三両余を納め続けなければならず、これが領民の大きな負担となっていたのである。

弥十郎が佐野奉行に提出した元金帳消しの願書も、一旦は即座に却下されたが、諦めずに粘り強く交渉した結果、翌年七月、十年後の完全撤廃を勝ち取ったのであった。

そのほかにも、「御救米制度」の確立、「潰株百姓」の再興、「農民夫役負担」の軽減など、次から次へと民政改革を実現させ、領民の生活向上に貢献した。その功績により、弥十郎は士分（二代限りの歩行）に取り立てられ、跡を継いだ隼之助からは代々歩行の家柄となった。

また、弥十郎は高い教養と識見をもって多くの貴重な著作を残している。特に、職務の指針として著した『世田谷勤事録』『自然賛』『泉の礎』、世田谷領の歴史を編年体で綴った『公私世田谷年代記』、大場家の一年の仕来り・行事を記録した『家例年中行事』は、世田谷の歴史を知る上で貴重な文献となっている。そのほか、漢詩・和歌等も嗜んだ。

石井至毅



狩野松州筆

11 石井至毅肖像画

絹本油彩
筆者 狩野松州
作成年代 明治三十九年（一九〇六）
縦三・六cm×横二七・一cm
寄託品

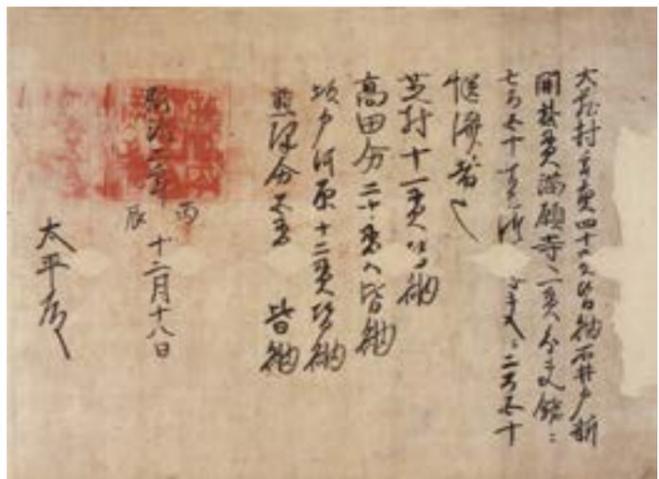
石井至毅（いしゐしげく）

安永七年（一七七八）～文久元年（一八六一）

大蔵村名主・石井市郎右衛門（諱は広昌、春翁と号す）の長男。幼名を万之助といい、のち、市右衛門、内蔵丞、内蔵允などと称した。また、最初の諱を兼備といい、以後、兼知、雅知、盛時、盛時、至毅と改名。天明八年（一七八八）、江戸牛込山伏町の儒学者・高瀬隆齋方に寄宿し、四書の句読を学ぶ。翌寛政元年、林大学頭の学頭・長坂徳右衛門に入門。文化六年（一八〇九）十一月、幕府御家人株を譲り受け幕臣となり、七〇俵五人扶持を給される。文化九年（一八一二）、「古今要覧」編集御用を仰せ付けられ、その編集責任者・屋代弘賢から考証学の手解きを受ける。嘉永四年（一八五二）、書物奉行に昇進。安政五年（一八五八）、布衣を許され、本禄一〇〇石、勤務中足高・扶持とも三〇〇俵を給された。

石井氏が大蔵の地にはじめて居を構えたのは、後北条氏の家臣であった石井良寛なる人物の時代であったという。至毅によれば、良寛は大永年間（一五二一～八年）に、大蔵村内「殿山」の地に居を構えて村内の開発に当たったという。しかし、この良寛という人物については、それ以外ほとんど何もわからない。したがって、石井家でも、北条氏康に仕えた内匠助（またの名を八大夫という）兼実という人物をその初代当主としている。

因みに、弘治二年（一五五六）の十二月十八日に世田谷城主・吉良頼康が発給した太平（Ⅱ大平清九郎）宛ての年貢皆済目録（下の写真）には「石井戸」の地名も新開地として記されている。



吉良頼康印判状
（大平清九郎宛年貢皆済目録／大平家文書）

大蔵村年貢四十五貫皆納、石井戸新開式貫、満願寺へ一貫分夫銭二七百五十すミ、つ□夫二三百五十、榎濟者也、
芝村十一貫皆納、
高田分二十貫皆納、
坂戸河原十二貫皆納、
熊沢分五貫皆納、

弘治二年 丙辰 十二月十八日
太平殿

福田岡右衛門・とめ

16 福田岡右衛門夫妻肖像画

絹本着色
筆者 不詳
賛者 大谷長政
作成年代 天保六年（一八三五）
縦八五・七cm×横五四・五cm
個人蔵



福田岡右衛門・とめへふくだおかえもん・とめ

安永四年（二七七五）〜安政五年（一八五八）
安永九年（一七八〇）〜文久三年（一八六三）
武蔵国多摩郡大蔵村の安藤茂兵衛（六右衛門）家に生まれる。通称茂八。
三十一歳で同村石井直右衛門の娘とめと結婚し、石井家に入り、岡右衛門と改名。石井家の幼い跡継ぎ谷三郎を支えた。のち、下祖師谷村へ移り、水車を経営、福田甚左衛門家の分家を創始した。

【賛翻刻】

追加
安永四乙未年出生
積善策 福田岡右衛門
父八大蔵村安藤茂兵衛
母八大蔵村石井直右衛門妹
安永九庚子年出生
釈尼妙言 妻女 とめ
父八大蔵村石井直右衛門
母八宇奈根村山中九左衛門娘

右岡右衛門実家に在てハ茂八と云、三十一歳之時、母之実家石井藤八病死せり、子息谷三郎幼年に付後見として茂八を貰請、藤八妹とめを以て是にめあわせ、これより岡右衛門と改名して谷三郎を守立、此節藤八父存命ゆへ、諸事老父之計ひなり、夫より十五ヶ年之後、谷三郎成長に依て岡右衛門者祖師ヶ谷村福田甚左衛門所持の水車を貰受、祖師谷村へ引移、数年之後子細有て右甚左衛門之分家と相成、是より氏を福田と改、しかるに岡右衛門実子新次郎生得農家を好まず、武家執心により、明石侯之家士大谷氏の養子となり彼家を相続す、大谷氏之妻女ハ、岡右衛門名跡八大蔵村石井龍助次男政八、岡右衛門姉なり

を養子して、家督を譲り、天保六乙未岡右衛門六十一歳・妻女五十六歳にして、故郷大蔵村帰里、隠宅を構ひ、塵世を通れ念仏三昧にて、楽隠居の身となること諸人のうらやむ所なり、

天保六乙未のとし
七十二翁 大谷長政（花押）

岡右衛門夫妻の生涯

正装した夫妻が穏やかな表情で着座している。二人の前には朱塗りの三つ組盃に盃台、銚子が置かれている。この肖像画の賛に記された夫妻の生涯と合わせて考えると、この絵は天保六年（一八三五）、肖像画の主・岡右衛門が数え六十一歳の還暦を迎えた際に作成されたものと見られる。以下、賛の記すところに拠りながら、岡右衛門夫妻の生涯を見ていく。

岡右衛門は、安永四年（一七七五）に大蔵村安藤茂兵衛と同村石井直右衛門妹との間に生まれた。大蔵村は、村高二七〇石余り、彦根藩と旗本三浦氏の相給村落である。文化五年（一八〇八）の村鑑によると、村内の家数は百十一軒、人数は四百五十八人であった。岡右衛門の生家安藤家は、当主が代々「六右衛門」を名乗っており、岡右衛門の父茂兵衛は、安藤六右衛門家四代当主であった。五代六右衛門（助三郎）は大蔵村名主を務めている。

岡右衛門三十一歳の時、同村石井直右衛門の跡継ぎであった藤八が病死した。藤八の息子谷三郎はまだ幼かったため、石井家では藤八の妹とめと岡右衛門を結婚させ、谷三郎の後見として岡右衛門を迎え入れた。岡右衛門は、安藤家にいた時には茂八を名乗っていたが、この時岡右衛門と改名し、幼い谷三郎を支えた。当時は、亡き藤八の父直右衛門が存命であったため、岡右衛門は何事につけ老父の意に従ったという。

それから十五年後、谷三郎が成長すると、岡右衛門は祖師谷村福田甚左衛門が所持していた水車を譲り受け、祖師谷村へ引き移った。その数年後、事情があり福田甚左衛門家の分家となり、岡右衛門は氏を福田と改めた。

岡右衛門が移り住んだ祖師谷村とは、大蔵村の北側で境を接する下祖師谷村のことである。下祖師谷村は、村高三八五石余りの幕領で、村内を仙川用水が南流

『文武高名録』



この『文武高名録』には、岡本黄石（左の写真）をはじめ、彼に近しい人々の肖像画が数多く掲載されていて興味深い。参考までにその凡例を以下に示しておく。

凡例

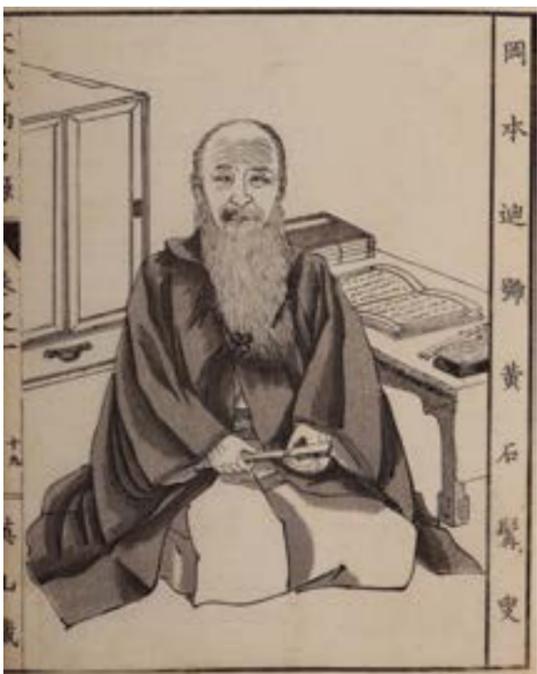
- 本編ハ維新後海内著名ノ摺紳高僧文人剣客豪商女流等ノ小伝写像詩文和歌題字序文図画等ヲ蒐輯スルヲ以テ目的トス
- 一本編中各家掲載ノ順序ハ高大諸君然諾ノ年月ヲ以テ逐次編輯スルモノトス
- 一本編小伝ハ概ネ寄贈ノ者ヲ記載スト雖トモ紙数限局アルヲ以テ取捨ナク能ハス且ツ各家ノ肖像ハ写真ニ由リテ伝写スルモノトス

『文武高名録』は、明治二十六年（一八九三）に、新井朝定なる人物が編輯発行したものである。

この本の編者新井朝定は、旧幕臣で、元の名を江川主殿といった。鳥羽伏見の戦いの後、新政府につき、戊辰戦争に際しては東山道鎮撫総督岩倉具定に従って宇都宮などに陣した。

維新後は、各地を漫遊して諸名家を訪ね、揮毫を請うて書画を蒐集した。

こうして集まった書画の紹介にその作者の肖像、略歴を附して冊子にまとめたものが、『文武高名録』上下二冊である（『皇国武術英名録』へ全五巻）も上梓している。



大沼枕山名厚字子壽別号考詩蘭又燕々堂仙史



小野湖山名長慈字侗翁別号狂々老夫



大沼枕山〈おおぬまちゃんざん〉

文政元年（一八一八）〜明治二十四年（一八九一）

幕末・明治前期の漢詩人。名は厚・益友。通称捨吉字名は子寿・直公。別号は他に熙々堂・水竹居。江戸下谷生まれ。十歳の時、父（尾張藩儒・大沼竹溪）と死別し、叔父鷲津益齋に養われる。叔父の塾で学んだ後、江戸に出て、梁川星巖の「玉池吟社」に参加し、宋の范石湖や楊成斎の詩風を学ぶ。氣韻の高い作品を発表して、世人の視聽を集めた。小野湖山・森春涛と並んで明治漢詩壇の第一人者となる。御徒町に「下谷吟社」を主宰し、その門弟は千人を数えたという。ここから関雪江・杉浦梅譚・中根半嶺らが輩出している。『枕山詩鈔』『房山集』などの著書がある。岡本黄石は同門の弟子である。

小野湖山〈おの こはん〉

文化十一年（一八一四）〜明治四十三年（一九一〇）

名を巻、のち、長愿といい、これを修して愿といった。本姓横山。通称を仙助、侗之助という。字は懐之、士達、舒公。号には湖山のほか、狂々道人などがある。近江東浅井郡高畑村（三河吉田藩領）の医師横山玄篤の子として同地に生まれる。十七歳の時、梁川星巖の門下に入り、頭角を顕す。嘉永五年、吉田藩から招かれて江戸で儒臣となった。ペリー来航以来諸藩の志士と尊攘を主張したが、安政の大獄が起こるに及んで、これに連座することを危惧した藩主の命により国元に幽閉された。以後、小野姓を名乗ったが、それは、吉田へ護送される唐丸駕籠に付された木札に「松平伊豆守預り罪人小野侗之助」とあったことに因むという。のち、赦されて藩費時習館の教授となつてからも、藩内尊王論の中心的役割を果たした。明治元年（一八六八）、徴士となり新政府に出仕、ついで豊橋藩権少参事となった。同五年上京、生来の詩才を認められ詩壇に名声を博すこととなる。岡本黄石は同門の兄弟子で、やはり同門の大沼枕山とともに、『黄石齋』一集〜五集に評を付けるなど、二人は生涯深い親交をもった。